当時の暮らしは今からしたら考えられんちゃ！

富山

～海から 10 分の山里　富山県滑川市東福寺～

神谷武雄（かみや たけお）
昭和 17 年 3 月 5 日生まれ　76 歳
富山県滑川市在住

○はじめに

今回お話を伺った神谷さんが住む富山県滑川（なめりかわ）市は、ホタルイカで有名な、漁業で栄えた地域です。そのため、私は滑川に「海の町」「漁港の町」というイメージを持っていました。

しかし、実際にこの地を訪れると、意外にも山間地が多いことに驚きました。

※滑川漁港から車を１０分も走らせれば、日本海が見渡せる山間部に着く

神谷さんは滑川市の山間の集落に生まれた方です。漁業のイメージが強い地域の、山間部の暮らしについて神谷さんにお話を聞きました。

○分家して今は市街地に暮らす

私が生まれたのは、滑川の東福寺というところ。市街地から１０ｋｍほどしか離れとらんから、車ならすぐ行けるわ。市街地からの海抜は２００ｍの山の中やわ。私は８人兄弟で６男坊の「おっじゃ」。「おっじゃ」というのは、次男坊以下のこと。滑川ではそういう呼び方をしとったが。私はおっじゃだから２６歳の時に分家して今住んどる場所（市街地）に家を建てたが。

分家したのは、山の暮らしが嫌だったとか、そういうことじゃない。おっじゃは分家するか、どこかへ養子へ出るか、昔はそういう仕組みやった。

分家して家を建てた時、今住んどる土地を買ったが。当時は田んぼやったから、そのままじゃ、ぬかるんで家を建てれん。だから、土砂を盛って土台を作ったが。海岸沿いで土石工事しとる現場に行って、土砂の余ったのを分けてもらうが。土砂はトラック１台分で200円。それを自分で、手で運んで、田んぼに地盛り (*1) したが。そんなもん考えられんちゃ。今からしたら。

家を建てる時には、自分の親の山の木を切って出したが。そん時に兄貴（長男）には世話になったわ。長男が働いて稼いだ金は、みんな「おっじゃ」のために使っとったわ。

＊１　地盛り…家屋の土台作り。当時は土砂を盛った後、手作業で土砂を馴らした。そして１～２年間かけて砂を沈下させ、固い土台を作ったという。

○ガス・水・電気

私が小学生の頃は、藁屋根の家ばっかりやった。瓦屋根の家は３軒しかなかった。車は５０年くらい前（神谷さんが分家する頃）になってくると、ある家もあったかなあ、というくらい。

ガスはなかったわ。何でも囲炉裏で火を起こして、ご飯作ったり、おつゆ作ったり、魚焼いたり。あとは「にか」。もみ殻のことを「にか」って言うが。飯釜の下にちり取りみたいな物で「にか」を入れて火をつけて、それで米を炊くが。火が一定で飯がおいしく炊けるが。ちょっと焦げたところがうまくて、わざわざ親に焦げたところをもらってたもんや。

私は小さい頃、家では風呂焚きを任されとったが。家の前の「どぶ」から水をくんで、薪に火をつけて風呂を沸かしとったわ。「どぶ」っちゃ、庭にたたみ１畳ほどの穴を掘って、そこに川の水を引いて作った小さなため池のこと。どこの家にもあったわ。そこでスイカを冷やしたり、洗濯したりしたもんや。

風呂は五右衛門風呂。家族１０人みんなで使っとったわ。どこの家もそうやった。最後に入る人は垢だらけ。そんな風呂に入っとった人も９０歳まで生きとる（笑）

水道は通ってなかったね。井戸の水を使ったり、沢の水を家々まで引っ張って使っとったわ。竹の中をくり抜いて樋を作って、何ｍもつなぎ合わせて、沢から水を引いたもんや。沢の水は、雨が降りゃ濁っとったけど、それでもみんな飲んどったね。沢の水はきれいでおいしかったわ。子供の時、沢の水を飲もうと手ですくった時に、メダカが一緒にすくえた時なんかは、水ごとメダカも丸飲みしとったねえ。おやつ替わりやったわ。今は農薬やら何やらで、とてもじゃないけどそんなことはできんね。

簡易水道が通ったのは、今から４０年ほど前かね。電気はあったけど、よく停電しとったわ。電柱はみんな木の柱やった。

○食事は質素に

食事といっても、そんな変わったもんは食べとらんかったよ。家の前の畑で作った白菜やらイモ類やらをおつゆにして食べとったわ。冬場は、１週間に一遍、親父が町に下りて、タラとか生魚を買ってくることもあったわ。軽く洗って、おつゆにして食べたね。後はその時その時の物を食べとったわ。秋だったら柿とかね。山にある、自然の草木の中で食べた物ちゃ、アケビとか山イチゴとか。それから栗ね。当時は山に行ったらいっぱい落ちとったわ。朝起きて腰カゴつけて山にいったら、すぐにカゴいっぱいに栗を拾えたもんや。

○行商さんの奮闘

冬は親父が魚を買いに行くこともあったけど、春から秋にかけては魚屋が村まで来とったわ。行商さん。魚が入った木の箱を３段も４段も積み上げて、それを自転車の荷台に載せてね。市街地から自転車で、週に何度かうちの村まで来てくれとったが。

そりゃ大変やったよ。坂道を一生懸命にこいで、魚屋が村まで上がってきて。だいたい坂道は、平野部から２ｋｍくらいあってねえ。村は海抜２００ｍやから、そりゃ急な坂よ。魚屋はそこを死に物狂いで上がってきたわ。

村に入る前に川があって、電柱みたいな丸太の橋が掛かっとったが。そんな橋、自転車じゃ渡れんやろ。だから、橋の前で魚の木箱を下して、自転車だけを担いで、横足になって橋を渡って、自転車を向こう岸に置いた後に、もう一遍橋を渡って、今度は魚の箱を運んで…。そんな風にして魚を売りに来とったわ。今の世の中からしたら考えられんちゃ。

魚屋の他には、豆腐屋とか反物屋とか。反物屋は農作業のもんぺとかを背中に背負って売りに来とったわ。

○雪との格闘

私が小学校５年の頃に大雪が降ってね。雪は一晩で１ｍも２ｍも積もったのを覚えとるわ。小屋根の上まで雪が積もってね。

当時、市街地まで出るがには、７～８ｋｍ山を歩いて下った集落まで行って、バスに乗らんにゃあかんかったが。村の外の大通りに出るまでは２ｋｍくらいあって、バスに乗るために、私の兄貴とか村の若い者が総出で道をつけとったこともよく覚えとるわ。みんな「ばんどる」着てね。ワラの細いやつで作ったカッパのこと。当時はカッパなんかなかったから。それを着て、そして、みんな　３ｍくらいの梯子を持って、それを雪に向かって倒して、梯子の上を歩いて雪を踏み固めたら、 梯子を紐で引っ張って、またその梯子を倒して雪を固めて。そうやって、村の外まで出る、２ｋｍの道をつけたが。今は除雪機があるけど、当時はそうやった。今では考えられんちゃ。

○仏壇を買いに魚津 (*2) まで

＊２　魚津（うおづ）…富山県魚津市。滑川市の隣に位置する。蜃気楼が有名な海辺の町。

私が中学１年の頃、家に仏壇がなくてね。うちの親父が、一家を守る物がないと駄目だと言って、仏壇を買うことにしたが。中古品があるという話を親父が聞いてね。中古品といっても、昔はどんな物かとホイホイと見に行く訳にもいかんかったし、その話だけ聞いて買いに行ったが。場所は魚津。私も手伝いでついて行ったが。

仏壇やからね。バスで行っては持ち帰れんし、人から荷車を借りて、歩いて買いに行ったわ。　荷車は車輪に鉄の輪っかがはまったやつ。当時は砂利道だから、木の車輪だとすぐに痛んでしまうやろ。当時は、早月川 (*3) に掛かる大きな木の橋の上にも、砂利が敷いてあったことを覚えとるわ。木の上をそのまま通るのは良くなかったのかねえ。なぜか砂利があったわ。

魚津まで１５ｋｍほどか。大きくて重い荷車を引いて、炎天下の中、親父と二人歩いて行ったわ。仏壇を買う時に、親父がヒモのついた、布の三つ折りの財布から紙幣を出して支払ったことが妙に印象に残っとるわ。それから家に帰る時が、それはもう大変なが。重い仏壇を荷車につけて、また１５ｋｍを歩いて帰るがいぜ。今からしたら考えられんやろ。

帰り道の１５ｋｍの内、最後の２ｋｍが大変やったが。山に登る坂道だから。親父と仏壇つけた荷車引っ張って、一生懸命、山道を上ったわ。

家に帰る前に駄菓子屋があってね、そこで川の水で冷やしたトコロテンを食べたのを覚えとる。あれはうまかったなあ。

＊３　早月川（はやつきがわ）…２級河川。富山７大河川の一つ。滑川市、魚津市などを流れる急流の河川。

○山里の現金収入

村の家はみんな農家やった。米が収入源で、家の前で作っとった白菜やら大根やらの野菜は、家で食べるもので、売って金に換えるということはなかったわ。

そして、みんな農作業の合間に稼ぎに行っとったね。建築関係が多かったわ。日帰りで山の下の土建屋まで働きに行くが。みんな一日いくらで日当をもらっとったわ。

それから立山に歩荷（ぼっか）に行った人も何人もおられたね。歩荷ちゃね、荷物を背負って、それを立山とか高い山に届ける仕事なが。ダムとか発電所とか、そういう山の上の建物の工事現場に荷物を届けたが。発動機とかセメントとか、そういうものを運んどったというから、どれだけ重かったか分からん。重労働やったから、土建屋に働きに出るよりも、倍の日当をもらえたらしいわ。その仕事で家建てた人もおるし。

でも、やっぱり危ない仕事やからね。一人亡くなったわ。自分の体重の倍の重さの荷物を担いだまま、岩に腰かけて休憩したがいと。岩の下は３００ｍの崖。ちょっと休んで岩から立ち上がろうとしても、荷物が重くて立てんと。だから、体を前後に揺らして反動つけて立ち上がろうとしたら、バランス崩して崖の下。儲けはあったけど危ない仕事やった。

○ふるさとへの思い

今でも、週に１、２回はふるさとに帰っとるが。親からもらった実家近くの山に、３０年ほど前に自分で山小屋を建ててね。そこに友達も連れてきて、一緒にお茶飲んだりするが。

何年前だったか、糸魚川（新潟）に山菜採りに行った時に、個人が作った、集落の案内看板を見たことがあってね。

※神谷さんと村の案内看板。村内の家々の位置とそれぞれの屋号（昔からの呼び名）が記されている。

これを建てた人は何とふるさとを愛しとるんだろうと、感動したことがあったが。それを覚えとって、私も還暦祝いの時に、村の案内看板を作って寄贈したが。それが１７年前。看板を作った時は、まだ１６軒の家があったけど、どんどん過疎化が進んでしまって、今は６軒しかない。

昔はよく食べとったアケビや山イチゴや栗も、もう全然ない。栗の木は虫に食われて全滅。地球の変化、温暖化とかそういうものの影響じゃないの。

アケビだって、猿やカモシカがみんな食べてしまって、随分少なくなったわ。昔は猿やカモシカなんておらんだのに。あと、イノシシね。４～５年前から一気に増えたわ。猿は１５～２０年ほど前から増えだしたかな。地球が変わってしまったのかね。

昔の暮らしは、今からしたら考えられんような大変さやったけど、あれはあれで、のどかで良かったかもしれんちゃ。

私は、ここ東福寺で生まれて、大人になってから１０ｋｍ離れた市街地に分家した訳やけど、やっぱり２０年以上過ごしたふるさとの空気が忘れられんでね。

神谷武雄さん
(2018 年 9 月撮影)

過疎化したり、昔あったものがなくなったり、変わってしまったこともあるけど、今でもこの山に戻ってくると、心が和むし癒されるが。

聞き取り／2018 年 9 月
聞き書き／末永好司

鮎90匹、釣って帰ってその後

休みに入ると仕事のこと一切頭から消えます。釣りは優先でしたね。

一日の記録、確か、釣りで９０匹ぐらい。１００以上釣る人ちょいちょいいますよ。僕の場合は一日行けばある程度必ず釣ってくる。当時ね。負けたくなかったから。

だから研究も熱心でした。自分がようけ釣りたいもんだから、記録してた。特記事項とか。長年（記録を）付けてるともう頭ん中にデータが入ってくる。だから何カ所も行ってるけど、比較的決まった場所に行ってるんです。この天気だと今日はあそこがいい、と。

鮎９０匹、食べるんですよ。当時、できるだけようけ釣りたかったからね。煮たり焼いたり、保存のために甘露煮にしとくとか、そういうことです。命を無駄にもしたと思います。冷凍は難しい。海の魚みたいにきれいにできない。急速冷凍機とかないですし、普通の家庭の冷蔵庫でやると腹がくしゃくしゃになっちゃう。

魚の味はあんまり変わったという印象はないんですけど、大いに違うのは、調理する腕前。初めの頃は、たくさん釣れるし、疲れちゃっとるし、いい加減な調理してたと思うんですけど、そしてその人が我慢ができずに動くでしょう、ほんでそこへ行く。そうやって釣りをしたんです。そこへ入りさえすれば瞬間的に釣れるっちうのが昔の鮎でした。

すごいのはね、（おとり）鮎が空中で飛んでくるでしょ。下で（川の中の鮎が）見とる。「この野郎、来やがったな」と思って待っとるんですよ。鼻でピューンとやって向こうでピューンと尻尾を上へ上げて、頭からポンと入れるんですよね。もう、待ってましたと、（おとりの）体が半分ぐらい水に入ったときに釣れちゃんです。飛びつくように。そんなことが非常に多かったんです。

鮎釣りってのはほんとに面白い。あんな釣りってないですよ。ものすごい勢いですよ、鮎。あんな小さなやつが。駆け引きですよね。あそこで釣れる、あそこで絶対釣ってやるっていう。でそのように持ってって、こちらの予想した通りに来る。かかった鮎がまた、力が強い。なんでこんな力があるんだっちうぐらいの力。

鮎釣り竿って、今はずいぶん細くなりましたけど、昔は太いんです。で、長い。なんでこんな太くて長くて重たい竿で、髪の毛のより細いような糸をつけて、なんでこんな仕掛けで、こんな姿で釣るんだ。もっと細い竿だとかね。あんだけ細い糸を使うんだったら、やわらかい竿でなけりゃ切れちゃうと思うんだけど、やわらかくちゃだめなんだ。

竿は人によって１０メートルの人もいるし８メートルの人もいるけど、だいたい平均すると９メートル。長いですよ。今はカーボン。昔グラス。その前は竹です。高いんですよ。よう買わん。安いやつで、腕でカバーする。